

梅

元
章
作

季は	地は	後	前
シテ	ワキ	シテ	ワキ
春	摂津	前に同じ	藤原何がし
		里女	
			し

「是は五条わたりに住居する藤原の何某にて候。さ
ても我いまだ難波津を見ず候ふ程に。此度一見せ
ばやと思ひ候。

サシ
「津の国の難波の春のゆかしさに。今日思ひ立つ旅
衣。日影長闊けき都の空。霞へだゝる山崎や。閑
戸の宿も名のみにて。戸さゝぬ御代は行きかふ人
の。姿さへ實にゆたけしや。

下歌
「こゝは何処ぞ旧年の。木の葉も積る芥川。しばし

ながらの旅心。

上歌
「蘆の若葉のなごはしみ。く。風も音せでよる波
の。響はさすが聞きて恋ふ。難波の浦のうらゝな
る。春の氣色を今ぞ見ん。く。

「面白や難波の浦の春の氣色。里は花咲き匂ひ満ち。
遠の山々打ち霞み。青海原は白波の。八重折る上
に海士小舟。行きかふ様はいにしへの。家持の卿
の詠めまで思ひ出でられて候。桜花今盛なり難波

の海。おしてる宮に聞しめすなへ。今は花いまだ
含みて梅の盛にて候。

シテ詞「なふ／＼今の歌をば。など誠のまゝに吟じさせ給
ひ候はぬぞ。

ワキ詞「不思議やな彼歌は。万葉集にありつるを。唯其まゝ
に口ずさみしに。誤りありや覚束な。

シテ「尤今ナウの冊子には左なんめれど。此歌は家持の卿い
まだ兵部の輔なりし時。公事にて此国にませし程。

二月の十三日よみ給へり。さて三月の三日にふゝめ
りし花の始めに來し我や。散りなん後に都へ行か
んと。春の始め都を出でゝ。今暫しますべきに斯
くよみ給ひしかば。彼二月の中の三日は。梅の花
こそ盛ならめ。其うへおしてる宮に聞し召すなへ
とは。大鷦鷯の天皇の御位に即かせ給ひし事なれ
ば。かたぐいかで桜の歌なるべき。

ワキ「實に理なり古き書には。文字の違ひのやゝ有れば。

よくわきまへて見るべかりけり。

詞 「さて／＼かくまで分き給ふ。御身は如何なる人や

らん。

シテ 「いや誰とても理の。ま／＼聞しめさんには。其人の名は不用ならん。まづ／＼先の御言葉の末に。花いまだ含みて梅の盛と宣ひき。梅の盛は花ならずや。

ワキ 「まことに是も誤りなり。何の花をもそれのみにて

は。花とのみよめど異花と。ならべていふに桜をのみ。花といふなる古言は。いかで其跡荒磯海。

シテ 「浜の真砂はよみぬとも。歌の言葉のかづ／＼は。ワキ 「人の心を種として。よみ出づるなるものからに。シテ 「よも尽きせじな去りながら。

地 「うらやすの。安き神代の伝へとて。／＼。設けでよみ出づる歌の道。直なればこそ鬼神をも。和し向くなれ如何でさる。浮べる古歌のあるべき。

「聞けばいよく著るき。歌の理木綿四手の。神の示しか有難や。

シテ「神かとは。うたてはかなき天乙女。たゞ夕風に難波江の。あしやよしやもわきまへで。そよと聞えし恥かしや。

地「今はさのみな包井の。深き心の底ひなく。聞かまくほしや。

シテ「さもあらば。

地「此木の本に下伏して。待たせ給はゞ夜もすがら。月の影もさし出でゝ。朧ながらも慰めんと。梅の陰に入ると見えて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。(中入)

ワキ歌
「春の夜の。月待ちがての枕さへ。く。取りあへず巻く衣手に。移る其香は隠れなき。闇にもしづき木陰かな。闇にも梅の木陰かな。

後ジテ「月うつる難波の海の夜の波。心もゆたに面白や。

如何に客人此夜らは。空もいとよう晴れ渡り。月の光も昼なして。花の姿もあらはならん。人にな洩らし給ひそとよ。

ワキ 「こは如何に有りし女の顔ばせながら。錦の衣玉かづら。斯かる姿は木の花の。精とも今はおもほえず。

シテ詞 「知ろしめさねば御理。本より梅の精なれば。唯其をりに従ひて。定まる姿もあらぬ上。舞をかなでゝ

慰めんと。かくは顕はれ來りたり。

ワキ 「先々かしこしさりながら。かたへに人の影もなし。琴笛鼓は誰やせん。

シテ 「天にます神のおきての風のまに。松の小枝は琴をしらべ。

ワキ 「汀の蘆は。

シテ 「笛を吹き。

ワキ 「岸打つ波は。

シテ
「覆槽の音。」

地
「おのづからなるものゝ音は。神さぶる此浦の。昔
を返す袖ならぬ。」

地クリ
「そもそも神代のならはし。草を賤しみ木を貴む。
其木の中にかばかりの。形色香の花なければ。梅
花をよみして木の花といへり。」

シテサシ
「さて梅の名はさる花の。咲き出るのみかうるはし
き。」

地
「薬の実さへ結びつゝ。木の肌妙に木立まで。異木
に勝れくはしければ。」

シテ
「うまでふ言を通はせて。」

地
「梅のその名をゆりたるなり。」

クセ
「其上神事の。御先に立たず宮人に。取らするも本
は此。ずはえに限る事なりき。また御仏の大御
法に。幸願ぎ得る事。是もずはえを取りてなり。
天皇の。大儀の御場にも。主殿の舍人等が。梅の

ずはえを捧げつゝ。紫の蓋の。頭に仕ん奉れるは。

御先をはらふ由にして。やがて神代のつたへなり。

シテ 「初春の。七日の豊明には。

地 「舞の台の飾らひに。梅と柳を立てらるゝ。さて木綿花は古へに。もてはやせしも此花を。とこしへに見まほしく。思ひて作りそめにけん。又毎年の大嘗に。したがふ小忌の人たちも。昔の髻華の心ばせ。木の花の木を冠の。巾子に添へ立て久方の。ざやかなでん。

天の日蔭のかづら垂。黒酒白酒の神酒たうべ。千代万代も限らじと。謡ひ舞ふ其袖を。うつしてい

「鶯の声ものどけき春風に。

地 「月もおしてる難波の浦。(序の舞)

シテ 「鶯の声ものどけき春風に。

地 「梅の匂ひや天に満つらん。天に満つらん。」

シテ 「ゆたけしや。何はの事か大君の。

地 「恵みに洩れねば草木まで。時をりくを違へずし

て。花咲き実を結び。

シテ
「人民も唯安らかに。

地
「人民も唯安らかに。明くれば暮るゝ。くるれば明
方の。東の山の端匂ひそめて。霞みながらに明け
行くまにてく。緑の空にたなびく白雲は。天つ乙
女の天つ楮領巾。撫づともく尽きせぬ巖も。我
君が代のたとしへに足らじな。唯幾久に天地の共
に。栄えまさなんめでたさよ。